

私たちの町の文化財 池のほとりの不思議

■第10話 失われた池辺寺根本中堂の復元

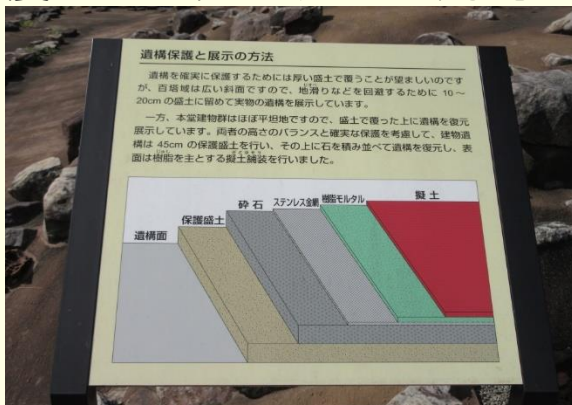
先月号で取り上げた百基の石塔群は、まさに9世紀の池辺寺の中核をなす施設ですが、寺としての建物はどのような形だったのでしょうか。

根本中堂たる建物群は、百塔のすぐ下、方角では東側に築かれていました。発掘調査では、中央の大きな建物を取り囲むように、回廊状に五棟の建物群が巡っていたことがわかりました。ただし発掘調査でわかるのは、①礎石から柱の本数や間隔、②中央建物は磚敷き（大きなレンガのようなもの）だが、中心部分には磚が無かったこと、③瓦が出土していることから、瓦葺き（屋根全体分にはやや瓦の数が少ないのだが）であったこと、などです。

ですから、たとえば柱の色や壁の有無、室内の装飾や本尊が何であったかなどは謎のままです。そのため建物は実物大で復元せず、小型のブロンズ製想定復元模型を作成し、建物群の横に展示しています。将来研究の進展によって建物跡の姿が変更になった場合でも対応できるようになっています。

また、斜面にある百塔が安全上の理由から調査時のままの本来の姿（復元した2基を除く）をしているのに対し、建物部分は平坦なので、本物の礎石などは保護盛土で埋め戻し、その上に姿形本物そっくりに加工・復元した石を配置しています。建物群背後の、切石を整然と敷き並べた排水溝なども本物そっくりに復元され、優雅さと先進性を垣間見ることができます。

熊本市文化振興課 師富 国博



5層構造の保護展示